

ログライン
ブレイン・コントロール（BC…脳に直接接続するデバイス）による頭脳拡張が当然となった社会。
BCをつけていない少女が、BCに接続された人間たちが洗脳されている事実を知り、コントロールによる集団自殺を阻止する。

「ブレイン・コントロール」

「ブレイン・コントロール」登場人物

文香(16) 地味な感じの女子高生。

井上(27) インテリ風イケメン青年

濤(16) 文香のクラスメイト

男(35) ドーチョー社の男

謎の女(29) 謎の女

広告の女(24) 電車の車内案内表示装置のC
Mに出ってくる女

乗客1(20) 女子大生くらい。

乗客2(20) 同上

乗客3(20) 同上

謎のマスゲームをする人々

○電車内・昼

電車の中でB Cをしている乗客たち。B Cはこぶし大の半球状の機械で、右耳につけるもの（小さなお茶碗が右耳に覆いかぶさっているようなイメージ）。B Cの表面から伸びる、スマホの充電端子みたいな小さな端子が、頭頂のつむじのところに食い込んでいて、それにより脳味噌とB Cがコネクタされている（ちよつとグロい感じ）。

ドア付近、見るからに地味な感じの文香。彼女だけが唯一B Cをしていない。それを、乗客1と3が少し離れた位置から見てゐる。

乗客1「（聞こえるようなこそこそ話）わ、見えてく、あの子、B Cつけてない」

乗客2「うわ、だっさ。みんなやってるのに」

乗客3「やだ。変なのー。バツカじゃないの？ 何考えてんだろ？」

乗客1「ちよつとく、そんなこと言ったら、可哀そうだよ（馬鹿にした口調で）」

文香、肩をすくめて鞆を強く抱きしめる。

急に何者かが、そんな文香の手首をとった。それは同級生の漣で、彼女はやけにデカイ腕時計をつけている。

漣「ね、こっち行こ！」

漣と文香、別の車両へ移動。乗客1と3が、その背中を見てケラケラ笑う。

（別車両）

漣「ねえ、あなたもそろそろいい加減、B Cしなよ」

漣が自分の耳当たりの髪の毛をめぐり、自分のB Cを見せる。

漣「みんなやってることじゃん。あんまり世間ズレなことばかりしていると、このあと、進学とか就職にも不利になるかもよ？ 協調性のない人なんだなって」

文香「あ、あの、私、ああいう、デバイス

を皮膚に埋め込むの、怖くて……」

漣 「怖いとか、そんな言い訳しないでよ。

何、意地にもなってるの？」

文香 「そんな……」

電車が止まる。アナウンスで駅名が告げられ、漣は口をへの字にする。

漣 「……今度、一緒に電気屋さんに行こう？ ドーチョー社のやつが安いから、それ買おう？」

文香 「あっ……」

漣、電車から降りる。電車が発車し、一人残された文香は不安げな顔。

電車の、車内案内表示装置のディスプレイに女が映って、広告が流れだす。

広告の女「みなさま、BCの買い替え時には、ぜひドーチョー社の製品をご利用ください。わが社のBCでは常に最新のニュースや流行を、あなたの脳髄に直接アップロードします。さらに、あなたの脳内物質をコントロールして、お友達との感情共感能力アップ！ これでみんなから取り残されることはナシ！ ドーチョー社は業界シェアの九十八パーセントを締めており……」

ふと、文香は電車から窓の外を眺める。何かに驚いたように、文香は目を見開く。

窓の外、ビルとビルの間、ベンチや噴水などがある小さな広場みたいなスペース。そこで多種多様な数十人の人間が、マスゲームみたいに、同時に同じ動きをしている。同じ方向に歩いたり、片手を同時にあげたり。まるで何者かに操られているようにしか見えない。

文香 「なに、あれ……操られてる？」

○小さい広場・昼

文香、マスゲームを見た公園に行き、ベンチに座っている。公園では多種多様な人がいたり通り過ぎたりしているが、まだ変な様子はない。人々はみんなBCをつけている。

当然、歩く音や話し声などのざわめきが聞こえる。

文香、腕時計を見る。

文香 N（確か昨日、だいたいこの時間に……。ほら、何もない。やっぱり私の勘違いだったんだよね……）

すると、急にざわめきが消えた。文香は驚いて顔を上げる。

昨日、電車の窓から見た奇妙なマスクゲームが目の前で行われる。それだけではなく、周囲のビルの窓から見える、ビルの中の人たちも、同じような動作をしていた。

文香 「うそ……」

その異様な光景に、文香、泣きそうな顔であたりを見回す。

だが、急にみんなはぴたっとマスクゲームをやめて、それぞれが普通の状態に戻る。まるでさっきまで操られたような動きをしていたことも自覚していないような様子。文香はますます困惑した顔になる。

すると、急に肩をたたかれた。文香はびっくりして振り返る。そこにはインテリ風イケメン好青年（井上）がいた。井上も B C をしていない。その代わりに井上は、大きなイヤリングをつけている。

井上 「君も、気づいたか？」

○喫茶店・昼

広場に接する喫茶店の一つで、テーブルを囲んでお茶をしている井上と文香。

井上 「おそらく、バグか何かだろう」

文香 「バグ……？」

井上 「そうだよ。そもそも、ああいうタイプの B C なんて、危険極まりないんだよ。確かに、脳みそを B C に接続させると、エモーションクラウドにアクセスして、多くの人間と感情を共感しやすくなる。でもそうすれば、いざ B C にバグが起こった時に、ああやってみんながおかしな行動をとることになる。だ

いたい、頭蓋骨格拡張による生体デバイス化なんて愚の骨頂だよ。今の学会では骨伝導型シナプス制御がメインの学説であり……（だんだん早口）」

文香 「（目を丸くして）え……え？」

井上 「いや、失礼。僕はそっちの専門なんですね」

井上は眼鏡をクイツ、と人差し指で直す。文香は懂れの表情。

井上 「大体、ああいう脳天にぶっ刺すような機械なんて、かっこ悪いじゃないか。まったく、みんな、よくやるよ。しかし、君もよく気づいたよね。あの異様な光景に気づくなんて誰もいないと思っていた。猫も杓子もBCをしている世の中、ちゃんと自分の頭で考えられる人間がいるなんて」

文香 「（照れて）いえ、そんな……」

井上 「このことは、誰にも言っちゃいけない。僕が独自に調査して、BCのおかしさを、しかるべき報道機関に報告するよ」

井上は、テーブルの上の文香の手を握りしめる。文香、顔を赤くする。

井上 「（文香の目を情熱的に見つめながら）明日、同じ時間、ここでまた会おう」

文香、嬉しそうにならず。

○広場・昼

文香、昨日と同じ公園に、同じ時間、同じベンチに座っている。

広場にいたみんなが、一斉にマッサージを始め。それを眺める文香に、昨日までの困惑の色はない。むしろ操り人形のようなみんなの姿を、文香は小馬鹿にしたような顔で見つめている。

文香 「そろそろ、終わり……」

だが、みんなマッサージをやめない。それどころか、みんな自分の近くにある壁に近づいて、自傷するように頭突きをやり始めた。

文香 「え？ あれ……」

その異様な光景に、顔が青ざめる文香。

井上 「文香ちゃん」

井上の声に、文香は笑顔で振り返る。

そこには、井上と、隣にもう一人男がいた。

男はスーツ姿で、冷血そうな薄顔をしている。

彼は井上と同じように、大きなイヤリングを

していて、見るからに異様な感じ。

文香 「え……？ あの……」

戸惑う様子の文香。男はニツコリとほ

ほ笑む。紳士的だが異常者っぽい目つきをし

ている。

井上 「紹介するよ。この人は、僕の直属の

上司」

男 「初めまして。私は、ドーチョー社の、

BC開発部門の者だよ」

文香 「えっ？ あ、あの……」

井上 「ごめんよ。僕もそうなんだ。ドーチ

ョー社の人間だったんだ」

○同じ喫茶店・昼

男と井上と文香、テーブルを挟んで向かい合う。窓の外ではいまだに集団壁頭突きをしている人たち。(男と井上の椅子の後ろは、井上がいったん外に出ないと男が外に出れないほど窮屈)

井上 「(早口) どうして世の中の人たちは、流行りものを好んだり、世間一般の常識や価値観に隷属したり、多数派に属したがると思う？ 答えは簡単。雑魚は群れたがる。それだけだ。だがその結果、彼らは自分の意志を持たなくなり、コントロールされ、操り人形のようになってしまう。あのように」

男が、いまだに集団壁頭突きをしている人たちを指さし、嘲笑の笑みを浮かべる。

男 「これはバグなんかじゃない。これはね、より大きな計画のための、実験なんだよ」

文香 「実験……」

男 「次の実験は……。見えるかい？ あ

そこに鉄工所があるだろ？ 今から彼らは、あの鉄工所の溶鉱炉に向かって自ら落ちていく。新聞には、ヒステリーによる集団自殺と報道される」

文香、おびえた顔になる。

男 「なぜ君に、こんな話をすると思う？ 君をスカウトするためだよ。君は世の中の大多数を占める、馬鹿な連中とは違う、選ばれた人間なんだよ。君もドーチョー社に入りなさい。これは、仲間のしるしだよ」

男、男や井上らがつけているのと同じイヤリングを、机の上に差し出す。そのイヤリングも機械であることが初めて視聴者に明かされる。男と井上の耳の後ろでは、イヤリングから伸びる端子が、彼らの耳後ろの皮膚に食い込んでいる（グロイ感で）。

井上 「さあ、君も僕らの仲間になるんだ」
井上と男、機械的で不気味な笑みを浮かべる。文香は恐怖の顔をする。

文香、目の前の紅茶に目を落とす。文香、はっと何か思いついた顔。

文香、井上に紅茶をぶっかける。

井上 「わっ、あっ、あちっ！」
文香、そこから逃げ出す。井上が熱くてパニックしているため、男、文香を追いかけて出れない。

文香 N（嘘だ……あの人たちだって……操られている！）

○溶鉱炉・昼

工場の溶鉱炉のドア（エレベーターの扉を大きくした感じ）が開く。その向こうでは柵もついていない炉がグツグツ煮えたぎっている。そこに歩いて向かうBCで洗脳された人々。

文香、その場に走って出てきて、歩いている人々をかき分け、溶鉱炉のドアを急いで閉めようとする。だができない。

文香 「お、重い……！」

炉に向かって無表情に歩いて近づいてくる、洗脳された人たち。

溶鉱炉の扉に手をかけたまま、もうだめだ……と絶望の顔をしている文香。

突然、文香の手に、だれかの手が覆いかぶさる。

それは漣だった。彼女は文香と目を合わせる。彼女のBCは、頭頂部の接続端子がとれていた。

漣 「いくよ！」

文香と漣、力を合わせてようやく溶鉱炉のドアを閉める。その勢いで転ぶ。

文香 「きゃっっ！」

漣 「やった！」

ドアに向かっていていた洗脳された人たちは、ドアの前にぶつかっただま前に進めず、その場で足踏みをしだす。人だかりの団子になった。

○学校の屋上・昼

文香と漣、学校の屋上で一緒に並んでいる。

漣はスマホで新聞サイトを見ていて、そこには『ドーチョー社員、BCを利用した集団洗脳疑惑』という見出しがあった。漣のスマホを持っている手には相変わらずデカイ腕時計。

漣はおおきなため息を吐く。

漣 「結局、開発部の人間を足切りしておしまい……ってカンジかな。本当に操っていたのは誰なんだろうね」

文香 「操られていたのは、誰なんだろうね……」

漣、自分のBCの接続端子を、自分の脳天に差し込む。差し込む時に、一瞬、痛そうな顔をする。

文香 「え？ あれ、つけるの？」

漣 「これ、ライドー社のだから。好きな時につけ外しができるんだよ。ちゃんと、自

分の意志で」

漣、どや顔する。それに合わせて、文香も、笑う。

○近くのビルの屋上・昼

学校の屋上が見下ろせる、近くのビルの屋上。謎の女が文香と漣を遠目で見降ろしながら、PCをいじっている（顔が映されず、不気味な感じ）。PC画面には「橈骨骨伝導によるシナプス制御」という題の論文。

女の手首には、漣と同じ腕時計があった。腕時計の側面にはライダー社のロゴマーク。

○T「ブレイン・コントロール」

E N D